

第2回 武雄市新文化施設エリア整備基本計画策定委員会

日時 令和4年8月23日(火) 10:00~
 場所 武雄市文化会館大集会室B
 委員 小坂智子氏、三島伸雄氏、黒澤伸氏、朝長勇氏、田中友子氏、溝上剛氏、大島久美枝氏、井上祐次氏、諸石信幸氏、鳥谷唯氏、山口祐香氏、諸岡智恵氏
 武雄市 文化課 松尾教育長
 事務局 こども教育部 文化課 新文化会館整備準備室
 生涯学習課
 シアターワークショップ 今川、古川

発言者	主な意見内容
① 意見聴取	
委員①	・市民に幅広い意見を聞くのは大切だが、基本計画の中にどのように取り込んでいくかが重要である。
委員②	・できるだけ早く運営主体を決め、施設計画へ反映していった方が良い。
② 基礎的条件の整理	
委員②	・今後、高校生はホールの使い手になり得る。現在建設中の鹿島市民会館は回遊性を意識した施設構造になっており、若い親子同士が交流できることを考えている。本施設の場合、大ホールは改修となるが、現施設に対する不足点を補っていけると良い。一方で、ホール以外諸室については活動団体の高齢化が進んでいる中で、いかに若い世代へ広げていくか、という視点がなければ活動自体が止まってしまうのではないかと懸念がある。 ・空間の作り方としては、現施設よりもコンパクトな作り方が必要ではないか。
委員①	・15年、20年後に文化会館を使う人がどの程度いるかを想定するためにも、人口構成比を把握しておいた方が良いのではないかと。なるべくたくさん使ってもらうことを想定し、現在の子どものことを考える必要がある。かつては施設来場者数が大事とされていたが、それ以上にどれだけ市民の利用を増やすかが重要である。
委員③	・市内すべての子どもに文化会館を訪れてもらうことは十分可能であると考える。金沢21世紀美術館ができあがって4か月間、すべての小中学生を招待した。学校に行くと同じように新文化施設・公民館へ行く、ということは可能ではないか。子どもたちがいるところにアウトリーチすることも考えられ、文化施設だけに頼る必要もない。文化活動団体の平均年齢が68歳というのは厳しいと感じるが、どのように若い人たちへアプローチするかをこの場で検討していかないといけない。 ・運営方針については、今年度のうちにある程度まとめる必要があるのではないかと。

	<ul style="list-style-type: none"> ・大ホールについて、現在の席数を本当に残さないといけないのか。施設利用状況より 1000 人以上の利用があまりないことが明らかになっているが、市民だけでは使いきれていないのではないか。外から公演を誘致することは必須であるとする。武雄のホールにはこれがある、とホールを選んでもらう工夫が必要。ステージを拡げて、ステージオンステージとして小規模でも利用可能とするなど、ユニークさを身につけないといけない。
委員④	<ul style="list-style-type: none"> ・大ホールでは年に 1 回、1000 人以上を招いて敬老会を行っている。大ホールがなければできないイベントの一つであり、大ホールを利用できる、ということが市民の目標、誇りでもある。大ホールを残す意味になるのではないか。
委員⑤	<ul style="list-style-type: none"> ・「オープンな使い方」がキーワードになってくるのではないか。誰でも使いやすい、一人でも使える、交流や出会いが生まれる場所が望まれている。用途が限られる部屋があっても良いが、用途や使用条件を限定しないで、誰もがクリエイティブに使える部屋・自由な発想で使えるスペースができていくと良い。 ・一人でゆっくりできる、ふらっと立ち寄れるといったキーワードが出てきているところが今どきの印象。いろいろな人とのつながりを感じたいという意識があることが伺える。これからの文化会館・施設のあり方として、個別に様々な目的で来訪した人が集まることで、パブリックなものとなつがる、出会ったことがない人たちと出会う場所を提供できる、機会を提供できる、といった視点が必要ではないか。 ・若い人たちも武雄の行く先、今まで知らなかった先輩に出会う場所が必要だと感じているのではないか。
委員⑥	<ul style="list-style-type: none"> ・本物を見たいといったことを考えると、1000 席規模は必要ではないか。 ・小ホールについては北方文化ホールに機能を移転することについて、抵抗の声が大きい。北方で活動するのであれば参加しないという人もいる。 ・若い人は市内にいるはずだが、文化会館を利用している人は少ない。 ・武雄公民館と併設であれば、そちらにも集会施設があると良い。 ・大ホールが閑散としているのはもったいない。一つの場を色々な使い方をする仕掛けづくりが必要ではないか。
委員⑦	<ul style="list-style-type: none"> ・大ホールの稼働率について、他の施設と比較するとどのような数字か。 ・各施設について、既存の文化会館基礎調査から時間が経過しているため、新たな視点で問題点・課題点があれば述べてほしい。 ・市民 WS においても本委員会と同様に、施設課題を共有する必要があるのではないか。
③ コンセプトの検討	
委員⑧	<ul style="list-style-type: none"> ・現施設は諸室が密集している印象。新たな施設では全諸室ガラス張りにしても良いかもしれない。中で行われている活動を見えるようにし、人がその前を通り、興味を触発するなど。会議室については多目的スペースがあれば良いのではないか。なんとなく散策して、面白いことに出会えるような施設構成とできると良い。
委員⑨	<ul style="list-style-type: none"> ・若者と話す中でほとんど行ったことない人が一定数いる。知的障がいを持つ方など、施設へ行きにくい人もいるため、アウトリーチ活動も含め

	て、利用を深めていけると良い。
委員⑩	<ul style="list-style-type: none"> 文化施設エリアの特徴をどう出していくかが重要である。武雄らしさ、この施設の売りは何かと考えてみると、庭園を持っているという場所の良さもあるのではないか。これらを施設の一部として捉え、歩きながらでも文化の交流が生まれる場を目指せると良い。
委員①	<ul style="list-style-type: none"> 周辺施設との連携、エリアとしての考え方が重要である。 コンセプトのキーワードが市民にうまく浸透するかは考えなければならない。かつての「西九州の応接室」という、外から来た人にも自慢できる部屋、芸術家をお迎えするというイメージから、令和の時代らしい、市民がつながることができる場所をつくる、というイメージをうまく言語化したい。整備方針の考え方についてはおおむね委員会としては賛同するが、それをいかに的確に伝えていくかが課題となる。
委員③	<ul style="list-style-type: none"> フォースプレイスというキーワードをうまく説明できるかという点が懸念。サードプレイスを大事にしてきた人たちにとってはインパクトのある言葉であり、全く知らない人にとっては何のことかわからない、となってしまうのではないか。発展性のあるサードプレイスという意味合いと捉えるが、この言葉を正確に使えるようにする必要がある。応接室からの変化、という点は賛同する。 サードプレイスとして、一人でも、用事がなくても立ち寄れるということはホームレスの人たちにとっても居心地の良い、という視点でもある。寛容性のある施設であることが重要。市民の誰もが一度でも足を運んだ場所となると良い。 施設は未完成で隙だらけでも良いと考える。50年後を見据えた余白のある、というコンセプトとマッチする。間・空地で面白いことができるのではないか。 文化複合施設ではなく、文化融合施設と謳っており、カルチャーコンプレックス・アートコンプレックスという意味合いではない。融合についても説明があると良い。融合というと、混ざりあってしまうイメージだが、混じらないものもあって良い。色で例えると赤と青を融合して紫になるが、その中には赤と青も残っており、さらにその裏側には補色である黄色も残る、というイメージ。 50年後というキーワードについて、金沢市では50年後を見据えたWSを行った。50年後というのは建物の耐用年数を迎える頃であり、その頃に残る人たちのことを考える必要がある。 施設の役割として、新陳代謝しながらも、武雄のことを考え続ける機能という位置づけのラボ的機能を盛り込んでいった方が良いのではないか。若い人が常時いて、未来について考え続ける機能。さらに、文化活動の相談窓口を持てると良い。文化活動を外で行っている人が地元に戻って来られる場や演奏場所の相談等、市民がやりたいことに対するサジェスションができる機能を設けても良いかもしれない。
委員⑪	<ul style="list-style-type: none"> 50年後を見据えると、子ども・子育てといったフレーズがあった方が良いのではないか。少子化も進む中で、さらにこれから子育て世代になる層を上手く取り込む必要があると考える。他の施設にはない、子育てに特化

	した機能、子どもが遊ぶスペースや庭園に遊具なども検討しても良い。
委員⑦	・文化のまちづくり構想とのリンクが必要である。フォースプレイスというキーワードは、市民の皆さんは聞きなれないかもしれない。
委員⑤	・人にやさしいというキーワードを多面的に捉えたい。何らかの理由で弱い立場に置かれている人たちをインクルージョンする、色々な人にとって使いやすいということを明確に打ち出していけたら良い。
委員⑥	・現在の図書館・歴史資料館では照明が暗く、視覚障害を持つ方にとっては見づらい環境。スポット的に特定のターゲットの人を誘致するような仕組みづくりができると良い。幅広い意味でのバリアフリーを検討する必要がある。